「少子化に対応した子どもにとって望ましい教育環境の在り方について」 審議のまとめ （概要版）

長野市教育委員会事務局　学校教育課　小中高連携推進室
電話：026－224－5097（直通）　FAX：026－224－5086
E-mail：gakukyou@city.nagano.lg.jp

【審議の経過】
- ・平成28年7月29日（第1回）　諮問
- ・平成30年4月16日～5月21日　パブリックコメント実施
- ・平成30年6月20日（第14回）　審議のまとめ（案）審議
- ・平成30年6月27日　答申

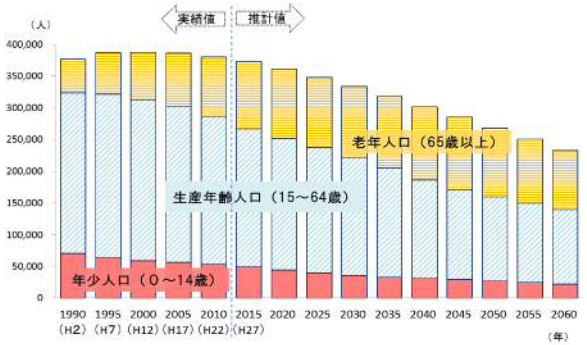
Ⅰ　長野市の教育環境　（本編 2～8頁、25～30頁）

【 社会の動向 】

○ 人口減少、少子・高齢化の進行

・2010（平成22）年を基準とした2060年の変化率は、総人口は39.1%、年少人口は58.6%、生産年齢人口は49.2%の減少が見込まれる一方、老年人口は2.5%の減少とほぼ変わらない状況が見込まれています。

≪長野市の人口の推移と推計≫



【資料】実績：国勢調査　推計：2040年までの人口推計は、国立社会保障・人口問題研究所（社人研）（平成25年3月推計）。2045年以降は社人研による推計の根拠値を用いて推計

○ 高度情報化、グローバル化の進展

・高度情報化やグローバル化が急速に進む中、社会は加速度的に変化し、複雑で先を見通すことが一層困難になってきています。
・人工知能やロボット技術が社会や生活を大きく変えていくという予測や、経済や文化など社会の様々な分野におけるつながりが国境や地域を越えて活性化し、多様な人々とのつながりは急速に緊密さを増してきています。

○ 地域のつながりや支え合いの希薄化

・かつては地域とのつながりも今より密接で、親以外の大人に囲まれ、年の違う子どもと遊ぶことで、自ずと子どもたちは社会性を育んでいましたが、近年は都市化や生活様式の変化等により、多くの人と触れ合って生活することが少なくなってきています。

Ⅱ　審議の中で見えてきたこと（主な意見）　（本編 10･11頁）

【 視点1　発達段階に応じた学びはどのようにあるべきか 】

○友達との遊びの中にも学びがあり、気付かぬうちに学ぶ意欲・態度や人間性等を育んでいるのではないか。
○小学校高学年以上では集団の中で学ぶこと、専門的な学びや多様な経験が大切ではないか。
○小学校高学年と中学校の連携が大切ではないか。
○小学校中学年までは少人数になった場合でも、地域の見守りの中で育つことや通学距離の問題への配慮が必要ではないか。

【 視点2　発達段階に応じた学びを実現するためには 】

○協働学習や共同作業により、子ども同士が互いの学び合いを通じて自己の考えを広げ深めることが大切ではないか。
○音楽や体育はある程度の集団が必要ではないか。
○学年が上がるにつれ大きな集団環境が大事ではないか。
○少なくとも小学校高学年以降は、学年に複数の学級が望ましいのではないか。
○学級数が少ないと、教員の数も少なくなり、学習保障や教育の質の保障が難しいのではないか。

【 視点3　地域との関わり 】

○地域により地域とのつながり方が異なり、それぞれの地域にあった学校群（グループ）を考えたらどうか。
○施設の複合化や多機能化の検討も必要ではないか。
○通学区域と行政区は、いずれは一致させるべきではないか。

意見を集約すると → 《どの発達段階にあっても「集団の中での学び」が大切》・《できる限り「地域に学校を残したい」》

Ⅲ　子どもにとって望ましい教育環境とは　（本編 12～17頁）

【 ◇ 発達段階に応じた多様な教育環境 】

○子どもの育ちの連続性と発達段階に応じた多様な教育環境を整えることが大切ではないでしょうか。

← 連続した9年間 →		
小学校		中学校
1から4年生	5・6年生	中学生
低・中学年期	高学年期	中学生期
「個の育ち」	「集団の中での育ち」	「自立への育ち」

裏面「18歳までに育てたい具体的な姿や能力・態度（長野市）」参照

【 ◇ 多様性の中で育つもの 】

《 好ましい人間関係をつくる力 》

○個性あふれる人々の集団の中で遊び、自分と意見や考え方が違う他者との協働的な学びを通して、自らを確立するとともに、好ましい人間関係づくりの力を育むことが大切ではないでしょうか。

《 様々な考えに触れ協働しながら問題を解決していく力 》

○予測困難な未来を切り拓いていくためには、自ら問いを立て、集団の中で、他者と協働しながら、問題解決能力等を育む必要があると言われています。

○学校は、将来、社会に出る子どもが、個性あふれる人々の集団の中で、他者を尊重し、考えや意見が異なる他者と協働しながら、学ぶ環境を整えることが大切ではないでしょうか。

Ⅳ　子どもたちの明日のために　～ 新たな学びの場の創造 ～　（本編 18～21頁）　裏面「発達段階に応じた新たな学びの場（長野市）」参照

【 ☆ 発達段階に応じた連続性のある学びの場を 】

○小学校低・中学年期、高学年期、中学生期と、子どもの育ちの発達段階を意識した学びの場を整えることが望ましいのではないでしょうか。
○幼保園や小・中学校が円滑に接続する環境も大切ではないでしょうか。

○児童数が減少した場合、地域の見守りの中で育つ、低・中学年だけで構成する学びの場（学校）をつくることも考えてはどうでしょうか　。

【 ☆ 多様性ある集団の中での学びを 】

子どもの育ちや学びの質を大切にするために
○小学校では、少なくとも一つの学年に複数の学級があったほうが望ましいのではないでしょうか。
○中学校では、小学校よりも更に大きな集団で、全ての教科で教科担任がそろえられるほうが、望ましいのではないでしょうか。

○子どもに寄せる願いを共有し、幅広い人々と触れ合い、学べる場という点から、施設の複合化・多機能化を考えたらどうでしょうか。
○地域との連携を進めるためにも、通学区と行政区の関係が少しでも分かりやすくなればよいのではないでしょうか。

【 ☆ みんなが集まって笑顔があふれる学校を 】

○子どもの将来を見据え、複数の小学校と中学校がグループなどをつくり連携し合い、小学校6年間と中学校3年間を連続している9か年ととらえ、「発達段階に応じた連続性のある教育」を、全ての小・中学校で展開することが望ましいと考えます。

Ⅴ　附帯意見（本編 22頁）

○一人一人の教員が、連続性のある教育の大切さを理解し、指導力等の向上に努め、実践に取り組むことが重要ではないでしょうか。
○学校の在り方を検討する際は、教育的な視点を第一としながら、財政面からの検討も必要ではないでしょうか。
○学校が持つ様々な機能面を考慮しながらも、教育的な視点を第一とした検討が必要ではないでしょうか。

発達段階に応じて大切にしたい子どもの育ち

18歳までに育てたい具体的な姿や能力・態度（長野市）

現行制度

個の育ち

- ・親密な大人への安心感や信頼感

愛着の形成と基本的信頼感の獲得を大事に

- ・自分で健やかな生活をつくる（自分でできることは自分でやろうする規則正しい生活）
- ・感じて、考えて、チャレンジする（自然や人やものと試行錯誤しながら夢中になってかかわる体験）
- ・自信を持ち、自分を好きになる（のびのび遊び、満足感や認められた喜びを感受する体験）
- ・聴いて、話して、分かち合う（相手に自分の思いを伝えたり、相手の思いを受け止めたりする姿）
- ・自分の好きなことを見つけて活動する（のびのび活動する体験）
- ・「人として行ってはならないこと」を知り、仲よく活動する（一人一人を大事に　ひとつになる体験）
- ・自然や美しいものに感動する（心を豊かにする体験）

自発的活動や基本的生活習慣を大事に

集団の中での育ち

- ・係や当番活動に積極的にかかわり、働くことの楽しさが分かる（お手伝いや自分の役割を果たし、貢献した達成感を味わう体験）
- ・友と活動する中で、協力することの良さや成就感を味わう（積極的にコミュニケーションをとり、人間関係を築こうとする姿）
- ・集団において自分の役割や責任を自覚し、最後までやり通す（やり遂げる体験）
- ・体験したり学んだことと、日常生活との関連を考える（地域社会とつながる体験）

自主性・自律性・規範意識等の獲得を大事に

自立への育ち

- ・自他の尊重の意識と他者への思いやりの心を養う
- ・他者とのかかわりを通して自分と向き合い、自己有用感を獲得し自己肯定感を高める
- ・体験活動等を通して、社会への興味・関心を抱く

自己の将来の生き方等を考え、目標を立てて計画的に取り組むことを大事に

- ・人としての在り方を踏まえ、自らの個性・適性を伸ばしつつ、生き方について考える
- ・国や社会の問題を自分の問題として考え、社会の一員としての自覚をもつ

現行制度：乳幼児期　幼保園（※）　低学年　小学校　中学年　高学年　中学校　高校

次世代を担う「生きる力」の育成　知・徳・体　バランスのとれた人間力の育成

「長野市乳幼児期の教育・保育の指針」「長野県キャリア教育ガイドライン」「しなのきプラン29」「長野市キャリア教育ガイドライン」「子どもの教育の充実に向けた在り方について（報告）　2009.11　文部科学省　」より作成

※幼保園…幼稚園・保育所・認定こども園をいう。

発達段階に応じた 新たな学びの場（長野市）

「多様性ある 集団の中での学び」を

9年間の 連続性のある教育

「できる限り 地域に学校」を

中学生期　【自立への育ち】　に重点を

※　自己の将来の生き方等を考え、目標を立てて計画的に取り組むことを大切に

小学校高学年期

多様な個性を尊重しながら

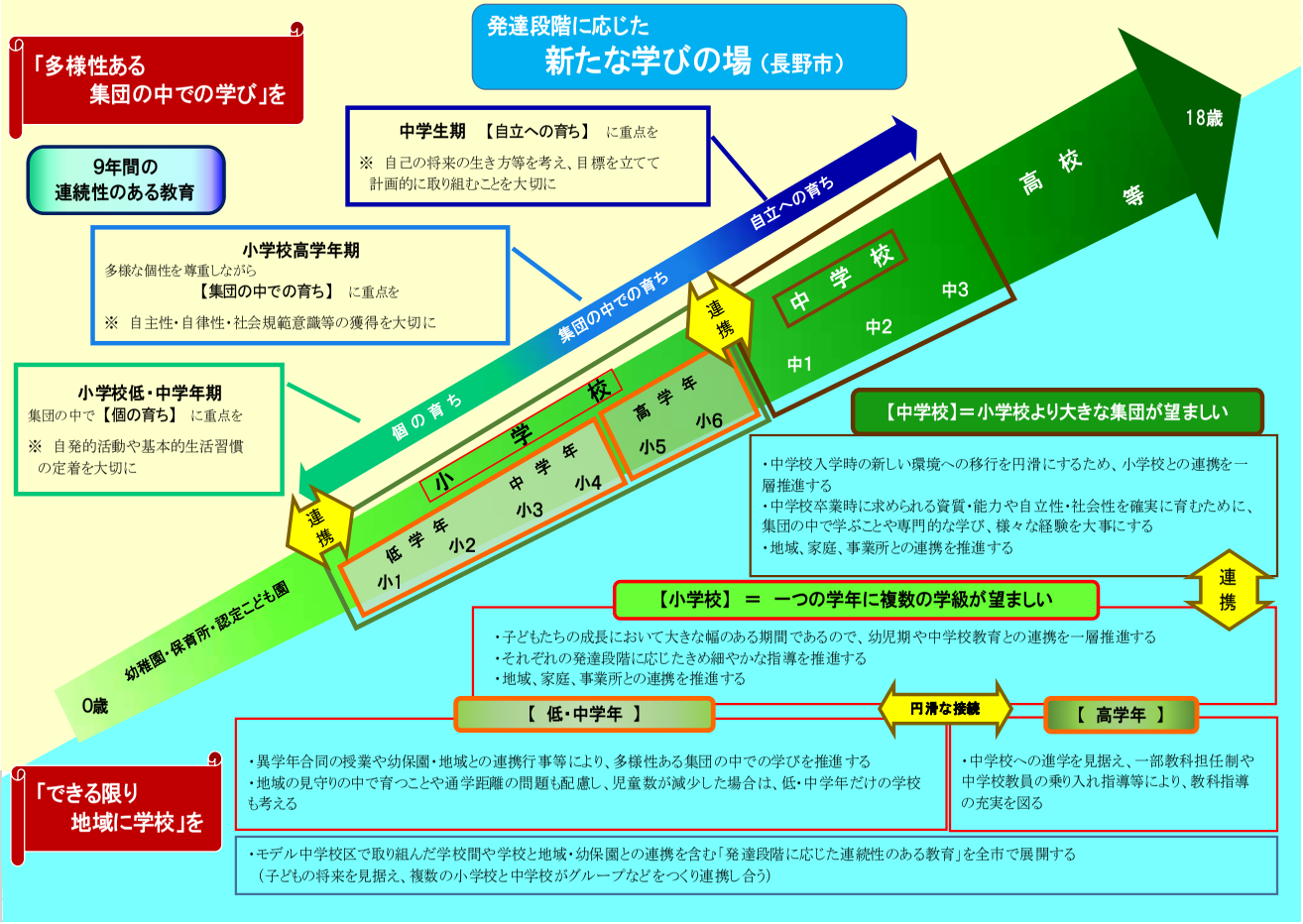
【集団の中での育ち】　に重点を

※　自主性・自律性・社会規範意識等の獲得を大切に

小学校低・中学年期

集団の中で【個の育ち】　に重点を

※　自発的活動や基本的生活習慣の定着を大切に



【中学校】＝小学校より大きな集団が望ましい

- ・中学校入学時の新しい環境への移行を円滑にするため、小学校との連携を一層推進する
- ・中学校卒業時に求められる資質・能力や自立性・社会性を確実に育むために、集団の中で学ぶことや専門的な学び、様々な経験を大事にする
- ・地域、家庭、事業所との連携を推進する

連携

【小学校】　＝　一つの学年に複数の学級が望ましい

- ・子どもたちの成長において大きな幅のある期間であるので、幼児期や中学校教育との連携を一層推進する
- ・それぞれの発達段階に応じたきめ細やかな指導を推進する
- ・地域、家庭、事業所との連携を推進する

円滑な接続

【　低・中学年　】

- ・異学年合同の授業や幼保園・地域との連携行事等により、多様性ある集団の中での学びを推進する
- ・地域の見守りの中で育つことや通学距離の問題も配慮し、児童数が減少した場合は、低・中学年だけの学校も考える

【　高学年　】

- ・中学校への進学を見据え、一部教科担任制や中学校教員の乗り入れ指導等により、教科指導の充実を図る

・モデル中学校区で取り組んだ学校間や学校と地域・幼保園との連携を含む「発達段階に応じた連続性のある教育」を全市で展開する
（子どもの将来を見据え、複数の小学校と中学校がグループなどをつくり連携し合う）